

CONTENTS

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】「環境建築」その先へ
第6回 -自然とつながる建築をめざして- 2
川島 範久

愛知発：活動報告
住宅研究会セミナー 4
石川 英樹・森 哲哉

岐阜発：JIAの窓〜ぎふ「20×20」コミュニケーション〜
20枚のスライド×20秒のプレゼンで自分を表現 5
北村 直也・瀧本 実

三重発：建築文化講演会2024
長坂 常「半建築」
〜「半建築」って何？「長坂常」ってどんな人？〜 6
久安 典之

自作自演 261
山奥の溪流で釣竿を振る至福の時間 7
藤巻 志伸

「常滑の景色」表紙の連載を終えて 7
浅井 裕雄

保存情報 第267回
データ発掘：浜松市浜名区細江町 吉野家(料亭)と庭園 8
冨田 正行

編集後記 8
川本 直義・宇野 享

岐阜発
各務原市役所新庁舎 見学レポート 9
長田 芳幸

地域会だより 今後の予定

- JIA東海支部
 - ・4/26 第10回支部役員会
 - ・5/24 2024年度支部通常総会
- JIA静岡地域会
 - ・4/ 11 2023年度監査の開催
 - ・4/ 18 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)
- JIA愛知地域会
 - ・4/19 企業PR会/第11回役員会
- JIA岐阜地域会
 - ・4/25 2024年度 岐阜地域会 総会
17:00〜 (ホテルグランパール岐山)
- JIA三重地域会
 - ・4/18 監査・第1回役員会
 - ・4/25 通常総会・記念講演会・懇親会

Bulletin Board

第16回 JIA愛知美術サロン展

2024 4/16 TUE ~ 21 SUN
AM10:00~PM6:00(最終日は PM5:00迄)

会場／東桜会館

名古屋市東区東桜2-6-30 TEL:052-973-2223

- 地下鉄「新栄町駅」1番出口徒歩5分・「高岳駅」3番出口徒歩5分
- お車の場合「芸術創造センター前」信号を西へ約100m 駐車場39台(無料)

主催／(公社)日本建築家協会 東海支部愛知地域会 美術サロン
問合先／田中 052-913-8168



JIA に入会して

ジュニア会員



堀居 知秋(JIA岐阜)
株式会社 車戸建築事務所

JIAの入会に当たり、各地域や多方面で活躍される皆様と情報共有が出来ますこと、大変嬉しく思います。

また、建築を通して、誰か(友人、知人、家族他物理的に出会ったことのないひとを含め)ひとりの為に自分にできることは何かを考えながら、これからの活動が有意義なものとなる様勉強させて頂きたいです。宜しくお願い致します。

ジュニア会員



河合 啓吾(JIA岐阜)
株式会社TAB

JIA建築家大会2023東海in常滑の「これからの建築家のあり方を考える」に出して頂きました。その際に全国の建築家と交流することができとても刺激的でよい経験ができました。また大会運営されていた建築家たちの熱量を感じる事ができました。JIAでの活動を通して私も成長して行きたいと思えます。

表紙 JIA東海住宅建築賞10年〜住宅はすべてに通ず 第1回 [母の家]

住宅建築賞が創設されてから早くも11年が経ちました。4月よりARCHITECTの表紙シリーズは「JIA東海住宅建築賞10年〜住宅はすべてに通ず」となり、スタートは記念すべき第1回で優秀賞をいただいた「母の家」です。タイトルを決める時に地名や外観、空間の特徴をヒントにすることが多いと思います。この家では“人馬一体というか、人家一体というか”人と家の関係性に注目したため「母の家」と名付けました。竣工以来、主役としてこの家を使いこなしてくれている89歳の母に感謝です。



吉元 学 (JIA愛知)
ワークのキューブ
愛知淑徳大学

自然とつながる建築をめざして

はじめに

去る2023年9月2日(土)~10月22日(日)に、東京・南青山にあるプリズミックギャラリーにて、「自然とつながる建築をめざして：川島範久展」と題した個展を開催した(写真)。本展覧会は、私が事務所や大学研究室のメンバーとともに、これまで取り組んできたプロジェクト、あるいは現在進行中のプロジェクトの模型やマテリアル、ドローイングを包括的に展示するものであり、構成を考えるにあたって、必然的に私がこれまで取り組んできたこと、目指していることを振り返り、総括することとなった。本稿では、先の展覧会によって考え至った新たな建築の方向性について紹介することで、「環境建築その先へ」と題した本連載の締めとさせていただきます。

「自然とつながる建築」とは

さて、私がこれまで取り組んできた／現在取り組んでいること、あるいは、目指していることは何なのかを改めて考えると、「自然とつながる建築」という言葉に集約できるという考えに至った。そして、この「自然とつながる建築」は、地球環境危機の時代である現代=人新世において求められる新たな建築の方向性の一つになると考えている。

ここでいう「自然」は、太陽光や自然風などの気候や、土や木などの素材あるいは大地、植物や虫・鳥、そして動物から微生物までを含めた生命のことを指す。これらは、地球の上=地球表層の数キロの薄い膜である地球生命圏で得られる《身近な資源》で、適切な活用の仕方すれば再生可能な資源となる。

振り返ってみれば、近代以降の建築・都市では、このような《身近な資源》を適切に活用することをしてこなかった。すぐ

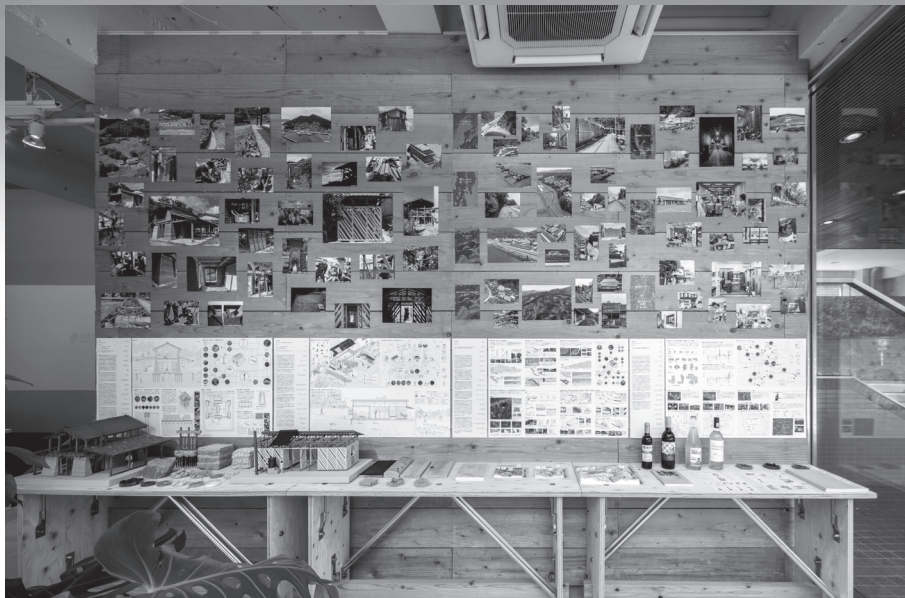
そこに太陽光や自然風があるにも関わらず、閉鎖環境をつくり、遠い場所の地中深くから掘り出した化石燃料を燃やしてつくるエネルギーを用いて、機械設備によって環境調整をしようとしてきた。そして、すぐそこに土や木があるにも関わらず、遠い場所の地中深くから掘り出した鉄や石油由来の材料などを用いてきた。構造物の安定性については考えても、その地形や水脈、土中環境のことは二の次にしてきた。また、観葉植物や愛玩動物はさておき、雑草や動物、虫、微生物など、人間以外の生物を徹底的に排除しよ

うとしてきたと言ってよい。私たちは日々、人間しかない世界に生きているかのように感じているといっても過言ではないだろう。

それに対して「自然とつながる建築」は、その《身近な資源》を積極的に活用するものである。太陽光や自然風を積極的に取り込むことで、運用時の機械設備によるエネルギー消費量を減らせるとともに、快適な温熱・光環境をつくることができる。これはいわゆる〈パッシブデザイン〉と呼ばれるもので、本連載の第1回で紹介した『環境シミュレーション建築デ

(写真) 展覧会の様子(撮影：鈴木淳平)





(写真) 展示会の様子 (撮影: 鈴木淳平)

デザイン実践ガイドブック』(川島範久著, 2022年, 彰国社)は、コンピューターによる解析技術を活用して、太陽光や自然風などを適切に取り込む〈パッシブデザイン〉の検討手法を紹介するものである。また、すぐそこにある土や木を、できるだけ余計なものを加えずに使えば、材料調達・施工と解体・廃棄に係るエネルギーを減らすことができるとともに、自然素材による温かみのある空間をつくることができる。また、その地形や水脈、土中環境を傷めないような建築・土木のつくり方をすれば、災害リスクを下げることができる。そして、多様な動植物、そして微生物までが共存できるような建築・都市環境にできれば、生物多様性を回復させることができ、災害リスクの低減、気候変動の緩和、感染症リスクの低減、さらには人間の心理的なストレス軽減も期待できるだろう。「自然」は変化するものであり、時に厳しく、弱いものである。しかし、だからこそ人は、その「自然」との関わりを通じて愛着を持ち、大切に続けたいという思いが湧いてくるのではないだろうか。

つまり、「自然とつながる建築」は、サステナビリティ(持続可能性)の実現に向けて重要な、ウェルビーイング(健康)、カーボンニュートラル(脱炭素)、レジリエンス(回復力)、サーキュラー(循環)、リジェネラティブ(環境再生)に加え、アタッチメント(愛着)の実現にも繋がるのだ。

「自然とつながる建築」の実現に向けて

ただし、「自然とつながる建築」は、上で述べたような《身近な資源》だけで全てを成立させようとするものではない。地域によっては自然の力だけでは暑く／寒くなってしまうこともあり、どの地域でも日が沈めば暗くなるので、機械設備とのハイブリッドにせざるを得ないだろう。また、地域における密集度合いや用途・規模によっては、そこで求められる防火性能や耐震性能を自然素材だけで満たすことは難しく、鉄・ガラス・コンクリートといった人工素材との適切なハイブリッドとする方が良いこともあるだろう。そもそも、現代の都市は既に人工物で溢れかえっており、それをなかったことにすることは不可能だ。

しかし、再生可能ではない有限の資源の使用量は抑える必要がある。そのためには、ハイブリッドになるとはいえ、機械設備や人工素材に頼る割合を可能な限り減らす努力をするべきだ。先ほど述べた〈パッシブデザイン〉は省エネルギーの手段となり、可能な限り空間をコンパクトにする〈平面・断面計画〉や、シンプルな構成にして省ける材料は省いたり、接合の仕方を工夫して解体容易性と転用可能性を高めるような〈材料・構法・構造計画〉による省マテリアルの工夫も求められる。また、そもそも建築物の規模や密度はどうあるべきかといった〈都市・地域計画〉の議論に立ち返る必要も出てくるだろう。

そして何より重要なのは、私たちはどのような暮らしをしたいのか、という問いだ。私たちは地球の上に生きていて、様々なモノとの連関の中で生きている。そのような感覚を失うことなく、自らの価値観やふるまいを見直していくことができるような建築・都市に再構築していくことが必要だと考えている。

川島 範久 KAWASHIMA Norihisa

建築家。川島範久建築設計事務所代表取締役。明治大学理工学部建築学科准教授。1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計勤務(-2014年)。2012年、UCパークレー客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。

明治大学 准教授
川島範久建築設計事務所 代表取締役

建築家 川島 範久



住宅研究会セミナー ●開催日:2024年 2月15日 ●講師:小金沢敏明氏

『恒久住宅の実現を目指して』～最新の住宅建材の動向～



エンデバーハウス(株)のご紹介で、30年前からアメリカシアトルで建材に携わってきた小金沢敏明氏(一級建築士、(株)ジェネックス(株)、ナーダッグ・ビルディングサプライ(株)代表取締役)をお招きし、最新の住宅建材動向について解説して頂いた。Power-pointや冊子資料、材料サンプルを使用した具体的な解説があり、非常にわかりやすく、参考になる情報を得たが、特に今回のセミナーの前提として話されたアメリカの住宅(建築)の捉え方に感銘を受けた。

アメリカでは、Amazon Goなど人を必要と

しないストアが広がる一方、スターバックスでは「リザーブ」という店舗を展開し、抽出方法を選択して人の手で淹れたコーヒーを提供するなど、サービスの二極化が進んでいるとのことである。

建築においてはどうかというと、アメリカでの恒久住宅(サステナブルハウス)には3つのテーマがあるようだ。

- ① **Healthy:有害物質を排出しない材料の使用**
- ② **Affordable:適切な金額での建設**
- ③ **Heritage:資産・遺産・価値の持続**

更にそれを踏まえた上でアメリカでの住宅3要素(資産価値の高い要素)とは、Function:機能、Performance:性能、Design:意匠にあり、中でも特に建築家に求められること(学べべきもの)はDesign:意匠とのことであった。アメリカの建築学では時代を越えて残る美しいデザインの追求が重要な要素であり、美しい建物はリフォーム、リモデリングにより再生し価値を高めていくものだと考えられている。

また、ライフスタイルとライフステージの考え方も日本とは異なり、家族構成の変化に合わせてライフスタイルに合った場所(街)に住み替えていくという。

このようにしてアメリカでは建物が受け継がれ残っていく。日本ではまだこういった考えが浸透していないが、日本の建築家も美しいデザインを追求し普遍的な建物を造るべきであるし、今後求められてくるのではないかと考えた。



石川 英樹 (JIA愛知)
石川英樹建築設計事務所

『建築家+』vol.4「特集 棲む」(仮称)に向けて

これまで住宅研究会では、「建築家カタログ」vol.1～5や住宅展(豊田市美術館)などで、情報発信を行ってきた。前回のカタログ発行から10年が経ち、新しい「建築家カタログ」についての議論が再燃した。いざ家づくりとなっても、何から始めれば良いかわからない施主が多い。建築家への依頼を検討している人は、潜在的に多いはず。本当に知りたい情報が届いているのか?といった意見のほか、写真情報は巷に溢れている。建築家とのマッチ

ングサイトも多く存在している。参加費がかかるカタログに若手が集まるのか?といった懸念の声もあった。

一方で、愛知地域会では、「建築家+」の発行を行ってきた。当初は、建築家mapと言っており、広く社会に建築家の所在を伝えることをイメージしていた。その後、『建築家+』(そのことに建築家加われば、そのことがさらに良くなるはず)と名称を変え、『建築家+』vol.1(2018)は「名駅エリア特集」、vol.2(2020)は「こどもと建築」、vol.1(2023)は「のこす・なおす・つかう」の発行が行われてきた。さて、次号vol.4は何をテーマに?と思索していたところ、「次号は住宅をテーマにしては」との声が上がり、そうか、その手があるな!と気づかされ、「建築家カタログ」は、『建築家+』「特集 棲む」(仮称)として進めることになった。

まだ始まったばかりであるが、住宅をデザインや性能(ハード)ばかりではなく、暮らしの豊かさ(ソフト)に焦点をあてて行きたい。時代を経て色褪せない名作住宅の視察を皮切りに、インタビュー、対談などで議論を深められたらと思う。紙面は限られるので、家づくりのイントロ(導入部分)になるが、詳しい情報は、地域会HPや会員HPにリンクさせる。愛知地域会と住宅研究会の協働事業により2025年発行を目指す。住研の会員のみならず、地域会の会員やこの地域の若手建築家の参加も期待している。



森 哲哉 (JIA愛知)
愛知地域会長/森建築設計室



20枚のスライド×20秒のプレゼンで自分を表現

●開催日:2023年 12月2日 ●会場:岐阜ビル

12月2日(土)岐阜駅から程近い古いビルをテナントとレンタルスペースとしてわたくし(筆者)がリノベーション設計・管理を行った「岐阜ビル」にて“ぎふ「20×20」コミュニケーション”が開催され32名が参加した。建築家クライン&ダイサムが考案したスライド1枚につき20秒×20枚=400秒で自分を表現する「ベチャクチャ」のフォーマットに倣い、岐阜周辺をメインとしたプレゼンター7名河合啓吾さん、瀧本実さん、五十川佳汰さん、手島来惟さ

ん、浅野寛さん、黒野有一さん、玉木直人さんがそれぞれ発表した後に質疑応答を、全員が発表を行った後にトークセッションを行った。

発表テーマは設計業務や現在学んでいることなどを半分とし、もう半分は日頃の趣味や好きなことを語られ質疑応答も活発に行われた。今回は初めての試みとしてプレゼンター同士のトークセッションを行い、こちらも盛り上がり次回以降も行なっていきたい。よくある建築の講演会と違い、登壇者がそれぞれ建築

業の中でも業種が異なり、20代から50代と年齢も大きく異なる。建築業界の中でも様々な価値観があり時代を経て変化してゆくことにもっと焦点を当てて次回は開催できるとより面白くなると思った。



北村 直也 (JIA岐阜)
北村直也建築設計事務所



トップバッターは、すごく緊張するだろうなあ。と、出番を2番目にセットしていただいたことに有難さを感じながら、キックオフ。401秒後に「もう」順番が回ってきましたので、いずれにしてもハラハラした20×20でした。1つのスライドに「きっかり20秒」でしたので、長いも短いもあったり、言葉を詰め込み詰め込みの場面があったりと、終始楽しませていただきました。頭の回転のいい人は早口でしゃべれるので、沢山の情報をお伝えすることができて羨ましかったですね。私はとても遅い。笑

ミッションは「趣味」を盛り込むことでした。音楽・映画・ゴルフ・麻雀・ファッション・アニメなど、趣味ってその人を説明してくれるんだな、ってとてもいいお題だと感じました。プレゼンターの本質と言うか、楽しみ方に共感し

た後で、取り組んでいる研究や仕事の話に入ると、聞き取りやすかったです。記憶にも残りますね。

岐阜工専の学生さんをはじめ趣味を楽しまれている皆様と比較して、私と建築家の河合氏は趣味と仕事を混同してしまっていました。笑。特にSLBHシリーズ。非常に面白い空間で構成を楽しまれていて、まさに想像から創造までを自らがコントロールしてやり遂げてしまうのだから、それ自身が趣味なんだと勝手に納得しました。すごい。

今回お声かけいただきました建築家の内田会長とは、岐阜県建築士会ぎふ木造塾でのお仲間で諸先輩方と一緒にかわいがっていただいています。当日も応援に駆け付けていただきました村瀬さん・桂川さんが居てくれた

ので笑いながら落ち着いていられました。そして、多趣味の学生さん、JIA愛知から建築家の黒野氏と、JIA岐阜にとどまらず多方面から来られていて、会の深さを感じました。会場となった「岐阜ビル」もクラブハウスにでもなりそうでイカしてましたですね。

会の運営や会場選び、垣根を越えた呼びかけなど本当に勉強させていただきました。他会との「合同開催」を試みられる時は、是非お声かけいただきたいと思いました。この度は誠にありがとうございました。



瀧本 実
㈱ライン工業

長坂 常^{じょう}「半建築」～「半建築」って何? 「長坂常」ってどんな人?～

●講演者:長坂 常氏 ●開催日:2024年 1月 27日 ●会場:アスト津/アストホール

講演のレポートを依頼されたものの、なかなかうまく筆が進まない。ひとまず「半建築」の書籍を拝読し、ひと通り再確認したところであらためて原稿に向かうものの、なかなか表現が難しい。締切りが迫って焦りつつも落ち着いて考えてみると、それこそが「半建築」というキーワードであり、「長坂常」というクリエイターの世界観のような気がしています。

“建築と家具の間”というのが当初の「半建築」の意味とのことですが、「半分完成、つまり未完成」と捉えられることも、言葉の響きから「反建築」というニュアンスで感覚的に捉えられることも、それはそれで受け入れる寛容さ。

のめり込んだレゲエの場づくりから、家具・内装を経て建築やまちづくりへとつながるシームレスな活動領域。

国内外の大小様々なプロジェクトごとに繰り広げられるストーリーは、「長坂常」という一個人からの複眼的思考から、その場が新たな息吹を吹き込まれていく様です。

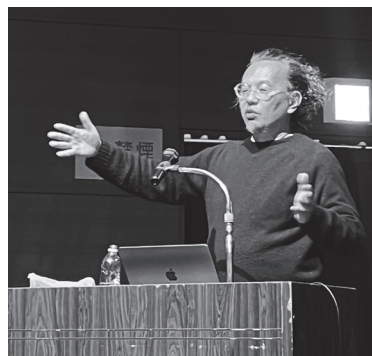
「見えない開発」の話の際、“いらないよね→変えなくていいよね”というくだりは、“つくる”ことだけを考えて、“つくらない”ことを考えない時代のことを思い出していました。バブル期に学生時代を過ごした私にとって、過剰につくられていく饒舌な、もしくは



講演の様子



▲会場の様子



▲長坂常氏

は空疎な建築群に対しては、辟易とした思いを抱かずにはいられませんでした。その頃からは社会情勢も変わり、建築界も様々な変遷を経たいま、依頼するクライアントと長坂氏とのやり取りを聞くと、ようやく生

活者の視点に戻って交わされている理想的な姿のように感じられました。

「JIA三重 建築文化講演会」は、1988年に始まり、今回で第37回目を迎えました。当日の来場者には過去の講師一覧が配布されましたが、その顔触れは、それぞれの時代としての視点と、地方都市での生活者としての視点が同時に反映された選定となっているように感じられます。こうした場が、地域内外の建築関係者や将来を担う学生達にとって、有意義な場であって欲しいと思います。



▲長坂常氏 著書

半建築

長坂常



2024 / 1 / 27

2024 / 1 / 20

アストホール / アスト津 アストプラザ

14:00 - 16:00 18:00

SAT 18:30 - 19:30 [開場 18:00]

定員270名 (入場無料・当日及着席)

講演者 長坂常氏

主催 JIA三重 建築文化講演会

後援 三重県建設業協会 三重県建築士会 三重県建築士会 三重県建築士会

協賛 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA

協賛 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA

協賛 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA 株式会社JIA

長坂 常 Naoki

1960年東京都生まれ。建築士事務所を営む。住宅、商業、公共施設など幅広い分野で建築家として活躍。近年は「半建築」として、建築と家具の境界を曖昧にする試みを行っている。

Work

- 2006 Arcus Flat
- 2011 RANASO
- 2012 Canille
- 2013 建築家
- 2015 丸いボトルのオフィス
- 2017 INNOCENTE BLANC
- 2018 建築家
- 2018 HAY TOKYO
- 2019 東京駅前丸の内線 中心の駅舎 - PLAT TOKYO

▲文化講演会2024 リーフレット

久安 典之 (JIA三重)
久安典之建築研究所



山奥の溪流で釣竿を振る至福の時間



私の趣味は魚釣りです。釣りといっても様々なジャンルがありますが、私の釣りはフライフィッシングと言って、虫に似せた毛ばり（モバ）で魚を釣り上げるものです。自作の毛ばりを糸の先端に結び、溪流の透き通った水にそっと落とすと、あたかもカゲロウが水面を漂うように流れていきます。するとある時突然に水面を割って渓魚が毛ばりを咥え、その瞬間に私と魚は細い一本の糸でつながるのです。フライフィッシングでは魚が毛ばりを咥える瞬間を見ることができません。その瞬間のドキドキこそ私がこの釣りをやめられない理由だと思います。しばし街の喧騒から離れ、仕事のことも頭から消し、山奥の溪流に身を置き夢中で釣竿を振る時間が私には至福の時間なのです。

あまり知られてはいませんが日本の河川のほとんどはそれぞれの地元漁協が管理し

ており勝手に魚を釣ることはできません。魚を釣るには漁協が発行する「遊漁証」を買わなければなりません。「遊漁証」で得た収入や補助金で漁協は河川の環境整備や魚の増殖のための放流などを行っています。ですから今時は溪流の上流部でさえも釣れてくる魚のほとんどは漁協が放流した魚です。

この原稿は4月号と聞いていますので、皆さんがこれを目にする頃は街中の桜が終わり、少し標高の高い山里当たりの桜がきれいに咲いている頃でしょう。私はというと、きつとどこかの溪で一心不乱に釣竿を振っています。

藤巻 志伸 (JIA愛知)

藤巻建築設計事務所



「常滑の景色」表紙の連載を終えて

建築家大会in常滑を盛り上げるための企画だが、12回を振り返ってみると、コトの始まりは大野町(常滑)にあった。

初回の風景は決めていた。「夕日」常滑は、伊勢湾に沈む太陽が美しい。それと、堀口捨己の「陶芸研究所」ここへ最初に訪れたのは、大野町で手掛けた「溶ける建築」の施工に当たり、文化財の埋蔵について、とこなめ陶の森の学芸員、小栗康寛氏のところへ打ち合わせに行ったときだった。調査の打ち合わせはすぐ終わり、小栗さんから、「陶芸研究所、見たことがありますか?」と声をかけてくれた。そして、熱のこもった解説付きの見学をすることになり、すっかり堀口捨己ファンに。お気に入りには、2階のバルコニーの連続梁からこぼれる光、それと背景になる常石神社の緑。雨の日に行くことをおすすめする。4月号はトップライト越しの

伊勢湾に沈む夕日とした。それ以外は毎度、思いつきで画像を探していたが、少しだけ思惑があるとすれば、人のいる景色を紹介したいと思っていた。表紙には、3人の人物と祭りの人々が登場する。

人と出会う。とは、コトがないと出会えない。

始まりは、大野町の施主、寺野氏である。彼ら家族は、暮らす場を探るために、古民家を借りて10年、人や地域との交流を通して、そこに定住することに。先の小栗さんや、INAXライブミュージアム、後藤泰男さんも。6月号の表紙、「常滑様式」は、常滑絶品パスタBirbante高杉さんの自宅改装の1コマ。

度々、建築家のアテンドコースとして、街歩きを行っていた。そのせいもあってか、常滑市文化財保護審議委員になることに、そ

して、建築家大会の会場探しで、ウロウロしていると、アーティストや窯の持ち主たちと、出会い常滑の話がきくことができた。

表紙に登場する2人の陶芸家は、いまでも交流している大好きな作家。また、ライブミュージアムの後藤さんがいなければ、奥条のまつりの人たちとも繋がらなかった。表紙のもう1人、会場実測中の西村さん。おくのほうで、奥野さんの姿も写っている。大会と一緒に汗をながしてくれた、頼もしい仲間たち感謝いたします。

浅井 裕雄 (JIA愛知)

裕建築計画



吉野家は、浜松市浜名区細江町気賀に建つ大正時代から続く料理旅館（現在は料亭）である。気賀は浜名湖北岸、姫街道交通の要所で江戸時代は関所が設けられ宿場町としてにぎわった町である。大正時代に吉野家を経営した野末邑次郎（昭和20-23年気賀町長）が料理旅館として建造し、戦後、板前の野島勘作に吉野家を譲渡したといわれ、現在の建物群と庭は野島勘作が施主となり、昭和初期一戦後にかけて料理旅館として建てられた4棟の近代和風建築と中央にある見事な池泉回遊式庭園、すべての建物から中央に配した庭が眺められ

て、敷地全体がバランスよく調和されている。

庭の作庭者は現段階では不明であるが野島勘作氏が付きっきりで作庭作業をされたと聞いている。現在のお手入れに入られているのは昭和の名作庭家・中根金作の設立した「中根庭園研究所」で修業されていた植木屋さん裁松軒さんが手入れされているとのこと。

現在も残る4棟の建物、特に目を引くのは茅葺屋根の北棟（日の出の間、萩の間）20数年前に岐阜県の茅葺き職人さんたちに依頼して葺き替えられたそうです。東棟、南棟はともに庭池と一体となって眺めが楽しめる造りとなっている。

当日は予約もせず訪れたので内部の見学はできなかったけれど、ご主人の話によると昭和初期の日本建築の凝った造りが随所に施されており、日本画家 野島青磁の生家ということもあり、有名な絵画、書（掛け軸?）もあるそうなので会員の皆様にお声かけさせていただき、多数で再度訪れゆっくりと内部の見学会と昼食会を企画したいと思います。



【概要】

所在地：静岡県浜松市浜名区細江町気賀904-1
 建設年：1926年-1945年 / 1950年増築
 北棟 木造二階建て茅葺及び瓦葺 建築面積104㎡
 登録有形文化財 / 登録年月日 2015年3月26日
 参考資料：吉野家ホームページ



北棟（登録有形文化財）



庭全景



東棟、右端・南棟



富田 正行 (JIA 愛知)

エム・プロダクツ

編集後記

●先月までの1年間は、全国大会を盛り上げようと、表紙も開催地常滑の写真を実行委員長の浅井氏に選定してもらいました。今月号ではその振り返りをしてもらっています。紙面では、全国大会の準備から報告まで、関連記事も多く掲載してきましたが、全国大会が終わり、各地域会活動も活発になってきましたので、その報告記事も増えてきました。

さて、今月号から表紙の連載も新しくなりました。5月には編集委員会も新体制になる予定です。新委員長は今までの常識に縛られず新しい発想で企画をしてくれるのではなかと期待しています。ずっと編集委員を務めてきた自分が保守的になり足を引っ張らないように気を付けたいと思います。以前よりページ数は

減りましたが、より充実した内容を提供するため、ホームページと連携することも課題となっています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。(川本 直義)

●川島範久氏の連載最終回を拝読し、浅沼組自社ビルの拝見機会を逸したことを後悔した。施工会社と共同し、その地域の土、既存施設の廃材から再生素材を開発する都市型スタジオ・ムンバイのような建築家が現れたことに、懐かしさと新しさを感じた。流通経済が未発達ゆえに生まれた集落的な地域特有の素材とディテールではなく、地球生命圏の持続を上位概念とし、素材の生成プロセス(小さな循環)を重視する設計思想に共感した。さらに、彼が語る環境建築の先では、建築・都市の再構築という(大きな循環)にまで建築家に関わるハードルが高い未来が示されている。近年、同様なスタンスの若い建築家に出会う

ことも多い。私自身もその重要性は認識しているが実態はなかなか伴わない。価値観を見直す感覚をさらに鋭敏にし、周回遅れでも並走したいと感じた。(宇野 享)

ARCHITECT

第427号

発行日 2024.4.1 (毎月1回発行)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会ブリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

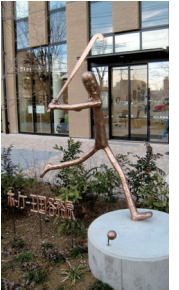
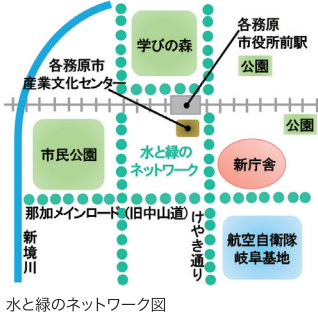
E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

各務原市役所新庁舎 見学レポート

●開催日:2024年2月2日(土)/15:00~16:50 ●会場:各務原市役所 ●参加者:26名

2023年11月に全面オープンした各務原市役所新庁舎見学会が開催されました。市の担当職員の方々及び設計JV(日本設計・大建設・Meet's設計工房)のMeet's設計工房 長尾英樹氏から計画概要の説明を受け、その後庁舎の内外を丁寧に案内していただきました。



水と緑のネットワーク図

参加者集合写真

見学の様子

ホッケー王国各務原 像

めざした航空機との共生、新しさの中に温かさ

●まちと市役所

各務原市は街なかに立派な公園が二つあり、春は新境川の桜まつり、秋は「学びの森」のマーケット日和など市民参加のイベントも盛んで高齢者も子育て世代も暮らしやすく、ホッケー王国としても有名です。新庁舎は二つの公園を結ぶ那加メインロード(旧中山道)とけやき通りが交わる敷地の道路寄りに建替えられました。歩行者の視線や身の丈に合ったスケールが意識されています。

残念なのは「夜間・休日に利用する市民活動や交流の場は市役所には設けず、近くの産業文化センター等既存庁舎を活用する」市の方針です。低層棟が市民活動や交流の場になれば、諸手続きで高層棟を訪れた際に気づいて興味を持ってくれるはずです。



外観

●新しさの中に温かさ

低層棟に合わせて高層棟はセットバックし、中山道の宿場町をイメージした木調塗装と連子格子風の窓で統一されています。

自然採光へのこだわりが人間らしい環境やスケール感を生み出しています。2階の執務室に光ダクト、3~6階の執務エリアに光庭、最上部には光がより深く届くように太陽光採光装置が設置されています。光庭の外壁はコンクリート打放し面に木調塗装とフラットバー縦目地で周到にデザインされています。ハイブリッドな新しさと同時に手跡の温もりが感じられます。

●航空自衛隊岐阜基地との共生

内部見学で一番衝撃的だったのは、6階の委員会室に入った瞬間に目に飛び込んできた窓いっぱい横たわる滑走路です。防衛省の定める1級防音サッシの二重窓のおかげで外の音は気になりませんでしたが、試しに窓を開けると轟音が耳を劈きました。

各務原市にとって航空機(騒音等)との共存は日常であり、新庁舎の設計は共生する道をめざしたことがうかがえます。建物高さは航空

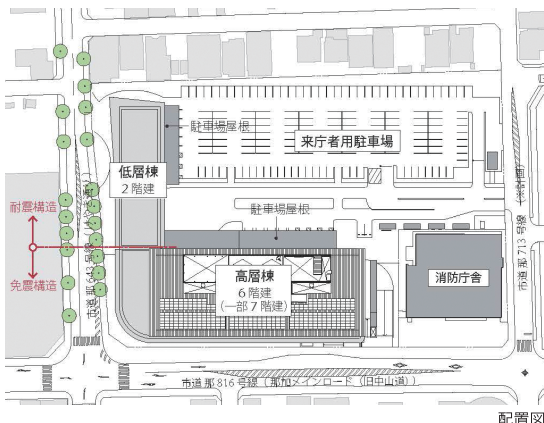
法による高さ制限(約27~31m)を受けている一方、屋根の流線形等の外観やインテリアデザインには積極的に航空機のイメージが取り入れられています。

●庁舎建築の特殊性

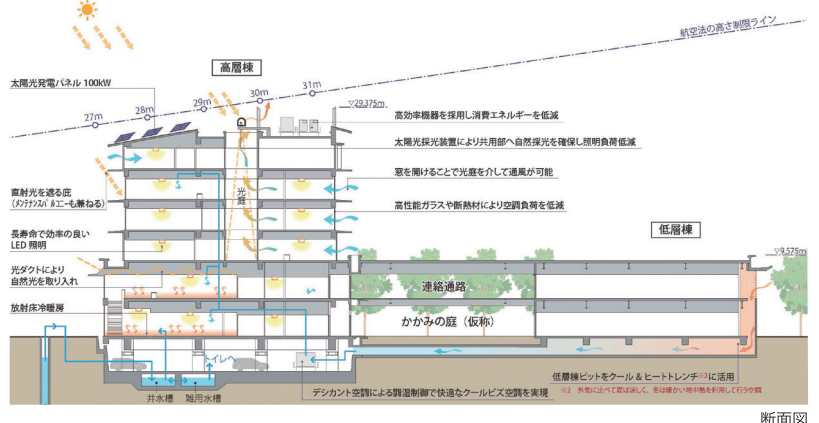
参考までに【各務原市公式ウェブサイト>くらし・市政>市政情報>新庁舎建設】で公開されている情報をご紹介します。

- ①「公共(特に庁舎)建築を建てること=市民の声を漏れなく聞いたプロセスを残すこと」という実態がわかります。
- ②サイトの「新庁舎の紹介動画」で工事過程と完成した映像を観ることができます。
- ③「プロポーザル提案」や「実施設計」の概要版も公開されていて、「プロポーザル提案」の完成度の高さに驚きます。「実施設計」の配置図と断面図を下記に転載しました。

長田 芳幸 (JIA岐阜)
長田芳幸建築設計事務所



配置図



断面図